

2013年(第24回)福岡アジア文化賞



大賞

中村 哲

日本 / 異文化理解・国際(民際)協力

中村哲氏は、パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続けてきた。現地での経験に基づく深い思索と発言・著作は、異文化の理解と尊重を求め、真の平和構築を目指す知的営為として、国際的に高く評価されている。



学術研究賞

テッサ・モーリス＝スズキ

オーストラリア / アジア地域研究

テッサ・モーリス＝スズキ氏は、卓越したアジア地域研究者である。民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会のあり方を構想し続けるモーリス＝スズキ氏は、グローバルな知識人としてアジアの人々の相互理解に多大な貢献を為している。



芸術・文化賞

ナリニ・マラニ

インド / 現代美術

ナリニ・マラニ氏は、映像と絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、インド亜大陸の近現代史と向き合い、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、今日のかつ普遍的なテーマに挑み続け、アジアを代表する美術家として、国際的に高く評価されている。



芸術・文化賞

アピチャップン・ウィーラセタクン

タイ / 映画、視覚芸術

アピチャップン・ウィーラセタクン氏は、制作・監督のみならず脚本・編集までを自ら行う気鋭の映画作家として、世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている。鬱蒼たる森を舞台に据え、民話や伝説に基づく物語のなかに個人的な記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法を用いた作品群は、国際的に高く評価されている。



大賞

中村 哲

日本
医師 (PMS (ピース・ジャパン・メディカルサービス) 総院長、ペシャワール会現地代表)
1946年9月15日生(66歳)

贈賞理由

中村哲氏は、パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続けてきた。現地での経験に基づく深い思索と発言・著作は、異文化の理解と尊重を求め、真の平和構築を目指す知的営為として、国際的に高く評価されている。

中村氏は、1946年に福岡市に生まれ、1973年に九州大学医学部を卒業後、国内の病院勤務を経て、1984年にパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールのミッション病院に赴任した。以来、貧困層に多いハンセン病や腸管感染症などの治療に始まり、難民キャンプや山岳地域での診療へと活動を広げた(『医は国境を越えて』)。また今世紀に入って頻発する干ばつに対処するためにアフガニスタンで1,600本の井戸を掘り(『医者 井戸を掘る』)、クナル川から全長25.5キロの灌漑用水路を建設し(『医者、用水路を拓く』)、現在では15,000ヘクタール余の農地を回復・開拓した。用水路工事は雇用を生み、難民の帰還を促すとともに、農地の回復は彼らが農民として平和に暮らすことを可能とした。その数は50万人を超える。

中村氏の活動は、ペシャワール会の現地代表として医療や国際協力の現場で自ら汗をかき率先垂範するだけにとどまらない。そこでの体験に裏付けされたイスラームに関する理解や現代世界に対する洞察を、ペシャワール会の会報や新聞、雑誌等に発表し、平和的手段による社会改革を広く市民に訴え続けている(『辺境で診る 辺境から見る』、『空爆と「復興」』、『丸腰のボランティア』)。10冊を超える平易で読みやすい著書は、アフガニスタンの現状をふまえた比較文化論であり、現地の人々の立場に身を寄せ、もう一つの別の視点から世界を見ること、考えることへと読者を誘う。

異文化への深い理解をもとに、自文化の相対化や内省を伴いながら、より良い社会のあり方を模索するという知的営為は、国際協力の基本姿勢である。現地の文化と人々を尊重することを最優先に続けられてきた中村氏の活動は、異文化理解と国際協力の理念の実践であり具現である。文化の振興と相互理解および平和に貢献するために創設された福岡アジア文化賞の精神を、30年にわたる活動で体現している中村哲氏は、まさに「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい。

経歴

中村 哲

-
- 1946 福岡県生まれ
 - 1973 九州大学卒業(医学部)
 - 1973-75 国立肥前療養所
 - 1975-80 大牟田労災病院
 - 1982 神経病学専門医
 - 1984 英国リバプール熱帯医学校 熱帯医学専門医(DTM&H)
 - 1984-94 ペシャワール[※]・ミッション病院ハンセン病棟医長(パキスタン)
 - 1984- ペシャワール会現地代表
 - 1986-98 JAMS(ジャパン・アフガン・メディカルサービス)顧問(パキスタン、アフガニスタン)
 - 1998-2002 PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)院長
 - 2002- PMS総院長

※現地発音ではペシャール

主な受賞歴

-
- 1988 外務大臣表彰(外務省)
 - 1992 毎日国際交流賞(毎日新聞)
 - 1993 西日本文化賞(西日本新聞)
 - 1996 読売医療功労賞(読売新聞)
 - 厚生大臣賞(厚生省)
 - 1998 朝日社会福祉賞(朝日新聞)
 - 2003 マグサイサイ賞「平和と国際理解部門」
 - 2009 農業農村工学会賞(旧 農業土木学会)
 - 2010 アフガニスタン国会下院 表彰

主な著作

-
- 『ペシャワールにてー癩そしてアフガン難民』石風社, 1989.
 - 『ペシャワールからの報告ー現地医療現場で考える』河合出版, 1990.
 - 『ダラエ・ヌールへの道ーアフガン難民とともに』石風社, 1993.
 - 『アフガニスタンの診療所から』筑摩書房, 1993.
 - 『医は国境を越えて』石風社, 1999.
 - 『医者 井戸を掘るーアフガン早魃との闘い』石風社, 2001.
 - 『ほんとうのアフガニスタンー18年間“闘う平和主義”をつらぬいてきた医師の現場報告』光文社, 2002.
 - 『辺境で診る 辺境から見る』石風社, 2003.
 - 『医者よ信念はいらないまず命を救え！ーアフガニスタンで「井戸を掘る」医者』羊土社, 2003.
 - 『空爆と「復興」ーアフガン最前線報告』石風社, 2004.
 - 『丸腰のボランティアーすべて現場から学んだ』(編), 石風社, 2006.
 - 『医者、用水路を拓くーアフガンの大地から世界の虚構に挑む』石風社, 2007.
 - 『人は愛するに足り、真心は信ずるに足るーアフガンとの約束』(澤地久枝氏との共著), 岩波書店, 2010.

※原著すべて日本語



学術研究賞

テッサ・モーリス＝スズキ

オーストラリア

アジア地域研究者(オーストラリア国立大学教授、オーストラリア研究会議特別フェロー)

1951年10月29日生(61歳)

贈賞理由

テッサ・モーリス＝スズキ氏は、卓越したアジア地域研究者である。氏は、北東アジア社会についてのこれまでの認識を、グローバルな視座とローカルな視座から鋭く問い直し、斬新な思想的課題を提起し続けてきた。

モーリス＝スズキ氏は1951年英国に生まれ、ブリストル大学でロシア史を学んだ後、バース大学で日本経済史の研究により博士号を取得。89年『日本の経済思想－江戸期から現代まで』を発表し、日本型の成長モデルが注目を集めた1980年代、新進気鋭の学者として登場した。

1981年ニューイングランド大学で経済史の講師、90年同大学准教授、92年オーストラリア国立大学アジア太平洋研究学院シニア・フェロー。97年同アジア太平洋研究学院日本史教授に就任。オーストラリア・アジア学会会長やアジア学アジアネットワーク代表など要職を歴任し、日本研究やアジア研究を主導した。

1990年代半ばより、モーリス＝スズキ氏は自らの関心を経済から政治や文化の方向に移し、カルチュラル・スタディーズの領域にも足を踏み入れて、「脱近代」と「脱植民地化」の視点から論陣を張った。特に、主著の『辺境から眺める－アイヌが経験する近代』では、近代国家の下で「辺境」に追いやられ、国民社会において「他者」として扱われてきたアイヌの人々の体験を、北東アジアの広がりや背景にみごとに描き出し、日本国内外から高い評価を獲得した。

知の創造には、研究方法の革新が必須である。これまでの実証研究においては、国家の公文書や重要人物の著作が信憑性のある史料とされてきた。だが、モーリス＝スズキ氏は、こうした研究の限界を打ち破り、民衆的な記憶や経験を掘り起こすため、先駆的な研究方法を切り拓いた。現地を旅して関係者と対話し、その土地固有の資料・史料を発掘した。諸国で収集した様々な情報を結びつけ、国家や地域の枠組みを超えた広がりの中で、人々の新しい物語を紡ぎ出す氏の文章は、凜として美しい。

モーリス＝スズキ氏のまなざしは、常に、社会の端にたたずみ、権力から遠く離れて生きる人々に向けられている。近年は学術研究と並んで、多文化主義を掲げるオーストラリアを足場に、アジア市民権ネットワーク代表としても活躍している。

民族や国家の境界を乗り越えて、人が人らしく生きられる社会を希求できるか。民主主義の時代、これは市民一人ひとりの問いである。国家の枠組みを超えた新しい地域協力のあり方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に寄与してきたテッサ・モーリス＝スズキ氏は、グローバルな知識人としてまさに「福岡アジア文化賞－学術研究賞」にふさわしい。

経歴

テッサ・モーリス=スズキ

1951	英国サリー州ケーターハム生まれ
1972	英国ブリストル大学卒業(歴史、政治、ロシア語) 英国環境省行政官
1980	英国バース大学博士号(経済史)
1981	オーストラリア、ニューイングランド大学講師(経済史)
1984-85	大分大学客員研究員
1987	オーストラリア、ニューイングランド大学上級講師(経済史)
1990	オーストラリア、ニューイングランド大学准教授(経済史)
1992	オーストラリア国立大学アジア太平洋研究学院シニア・フェロー
1994	オーストラリア人文科学学術会議会員
1995-98	オーストラリア人文科学学術会議国際事務局長
1997	オーストラリア国立大学アジア太平洋研究学院教授 オーストラリア、ニューイングランド大学博士号(経済学)
1998-2002	オーストラリア外交問題評議会委員
1999-2000	一橋大学社会学部客員教授
2000-04	アジア学アジアネットワーク代表
2001-02	オーストラリア、アジア学会会長
2004-05	オーストラリア国立大学アジア太平洋学部長
2004-	アジア市民権ネットワーク創設者、代表 アジアライツ(アジア市民権ネットワークのオンラインジャーナル)編集者
2008-09	ハワイ大学東西センター、POSCO客員フェロー
2009-10	東京大学大学院学際情報学府客員研究員、国際交流基金フェロー
2010	早稲田大学高等研究所客員教授
2012	オーストラリア研究会議特別フェロー

主な著作

- 『コンピュータピアを越えてーインフォメーション・オートメーション・日本の民主主義』ロンドン・ニューヨーク：キーガン・ポール・インターナショナル, 1988.
- 『日本の経済思想ー江戸期から現代まで』ロンドン、ニューヨーク：ラウトリッジ/日産日本問題研究所(オックスフォード大学), 1989. [日本語、スペイン語翻訳版あり]
- 『日本の科学技術変換』ケンブリッジ：ケンブリッジ大学出版, 1994. [韓国語、中国語翻訳版あり]
- 『日本を再発明するー時間、空間、国家』ニューヨーク：M. E. シャープ, 1998. [スペイン語翻訳版あり]
- 『辺境から眺めるーアイヌが経験する近代』(日本語) 東京：みすず書房, 2000. [韓国語翻訳版あり]
- 『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本』(日本語) 東京：平凡社, 2002, 2013. [韓国語翻訳版あり]
- 『自由を耐え忍ぶーグローバル化時代の人間性』(日本語) 東京：岩波書店, 2004.
- 『過去は死なないーメディア・記憶・歴史』ロンドン：ヴェルソ, 2005. [日本語、韓国語翻訳版あり]
- 『北朝鮮へのエクソダスー「帰国事業」の影をたどる』メリーランド州ランハム：ロウマン&リトルフィールド, 2007. [日本語、韓国語翻訳版あり]
- 『北朝鮮で考えたこと』メリーランド州ランハム：ロウマン&リトルフィールド, 2010. [日本語翻訳版あり]
- 『国境線としての日本ー戦後の外国人管理と国境管理』ケンブリッジ：ケンブリッジ大学出版, 2010.
- 『歴史戦争を越える東アジアー暴力の亡霊に立ち向かう』(共著), ロンドン; ニューヨーク：ラウトリッジ, 2013.

※原著が英語で邦訳版があるものは、邦訳版の著書タイトル使用



芸術・文化賞

ナリニ・マラニ

インド
アーティスト
1946年2月19日生(67歳)

贈賞理由

ナリニ・マラニ氏は、アジアを代表する美術家として、国際的に高い評価を得ている。インド亜大陸の近現代史と向き合い、映像と絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、今日のかつ普遍的なテーマに挑み続けてきた。

マラニ氏は、1946年、パキスタン(当時は英領インド)のカラチに生まれた。翌1947年、インド、パキスタンの英国からの分離独立の混乱の中、マラニ一家はインドのコルカタへ逃れた。1969年にムンバイのサー・J.J.美術学校を卒業した後、フランス政府奨学金給費生としてパリに留学、1973年に帰国してムンバイを拠点に制作活動を続けている。1987年、インドで初めての女性アーティストによる女性アーティスト展「鏡の向こうに」を企画開催して注目され、1990年代になると初めてのインスタレーション作品の制作や観衆参加による公開制作・討論の展覧会「欲望の都市」を開催するなど、インド国内で高まったヒンドゥー至上主義に対する危機感をバネに、保守的なインドのアートシーンに新たな表現領域を切り拓いた。アジア太平洋トリエンナーレ(ブリスベン、1996)、ニュー・ミュージアム(ニューヨーク、2002)での個展のほか、ヴェネチア・ビエンナーレ(2007)、ドクメンタ(カッセル、2012)など数々の国際展に招かれ、欧米、アジアで開かれるインド現代美術展の中核的存在として活躍している。また、福岡アジア美術館での滞在制作(1999-2000)や、国立新美術館でのアーティストファイル展(2013)など、日本でもたびたび紹介されてきた。

マラニ氏はその作品において、インスタレーションのような現代的な表現形式を取りながら、ガラス絵や影絵芝居、走馬灯、神々を描いたカリガート民俗画など、伝統的な民衆の造形世界と深く結びついた懐かしい温もりや夢のような幻想性を醸し出している。しかし、その主題は、原理主義による宗教対立、戦争や核問題、女性への暴力や抑圧、環境破壊など、世界が直面する深刻な課題や矛盾に応答するものであり、多様なイメージの断片を重ね合わせ、善悪二元論のような単純な図式に還元されない多層的な物語を生み出している。

世界が直面する困難な課題を題材に、インドの伝統に根ざしながら新鮮な表現を追求した作品を意欲的に発表して、国際的な評価を確固たるものとし、アジアを代表する女性アーティストとなったナリニ・マラニ氏は、まさに「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい。

経歴

ナリニ・マラニ

1946	インド(現パキスタン)、カラチ生まれ
1969	サー・J.J. 美術学校卒業(ムンバイ、インド)
1970-72	フランス政府奨学金給費生として、パリに留学
1984-89	インド政府アート・リサーチ・フェロー
1989	USIA(米国広報・文化交流庁)フェローシップにてファイン・アーツ・ワーク・センター滞在アーティスト(ケープコッド、米国)
1999-2000	福岡アジア美術館滞在アーティスト(日本)
2001-03	アムステルダム国立美術アカデミー特別顧問(オランダ)
2010	サンフランシスコ・アート・インステチュート芸術名誉博士号(米国)
2013	ポンピドゥー・センター「イン・ヴィヴオ」(講演とパフォーマンスのシリーズ)にて講演(パリ、フランス)

主な個展

「象形文字とその他の作品」ジャハーンギール・アート・ギャラリー(ムンバイ、インド) 1991
「欲望の都市」ギャラリー・ケモールド(ムンバイ、インド) 1992
「トーバ・テック・シンを思い出して」プリンス・オブ・ウェールズ博物館(ムンバイ、インド) 1999
「ナリニ・マラニ:ハムレットマシン」ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート(ニューヨーク、米国) 2002-03
「根源を晒す:ナリニ・マラニの絵画作品」ピーボディ・エセックス博物館(セイラム、マサチューセッツ州、米国) 2005-06
「ナリニ・マラニ」アイルランド現代美術館(ダブリン、アイルランド) 2007
「ナリニ・マラニ:影に耳を傾ける」アラリオ・ギャラリー(ニューヨーク、米国) 2008
「ナリニ・マラニ:内在する他者との分裂」カントナル・デ・ボザール美術館(ローザンヌ、スイス) 2010
「インスタレーションビデオ作品展「母なるインド」」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館(シドニー、オーストラリア) 2012

主なグループ展

「鏡の向こうに」(巡回展:ポーバル、ニューデリー、ムンバイ、バンガロール) 1987-89
「第1回ヨハネスブルク・ビエンナーレ:アフリカス」(南アフリカ) 1995
「第2回・第4回アジア太平洋現代美術トリエンナーレ」クイーンズランド州立美術館(ブリスベン、オーストラリア) 1996-97, 2002-03
「インド現代美術展:神話を紡ぐ作家たち」国際交流フォーラム(東京) 1998
「センチュリー・シティ:近代の大都市における芸術と文化」テート・モダン(ロンドン、英国) 2001
「第8回イスタンブール・ビエンナーレ:詩的正義」イェレバタン地下宮殿(トルコ) 2003
「第3回ソウル国際メディア・アート・ビエンナーレ:デジタル・ホモ・ルーデンス」ソウル市立美術館(韓国) 2004-05
「第52回ヴェネチア・ビエンナーレ:感覚で考えよう、思考で感じよう、現在形のアート」(イタリア) 2007
「第16回シドニー・ビエンナーレ:革命-変化するフォルム」(オーストラリア) 2008
「パリ・デリー・ボンベイ…」ポンピドゥー・センター(パリ、フランス) 2011
「第13回ドクメンタ」(カッセル、ドイツ) 2012
「アジアの女性アーティスト展:アジアをつなぐ-境界を生きる女たち 1984-2012」(巡回展)福岡アジア美術館(福岡) 2012、栃木県立美術館(栃木) 2013、三重県立美術館(三重) 2013

主な収蔵美術館と作品

ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館(シドニー・オーストラリア):『ローハル・チャウルの象形文字』1991、『ドガ連作』1992、
『記憶:記録/抹消』1996、『しみ』1999、『多様性の中の統一』2003、『母なるインド:痛み表現におけるそれぞれの働き』2005
大英博物館(ロンドン、英国):『夢見ることと汚すこと』1991
ジョルジュ・ボンピドゥー国立美術文化センター(パリ、フランス):『マッド・メグを思い出して』2007-11
福岡アジア美術館(日本):『略奪された岸辺』1993、『しみ』1999、『ハムレットマシン』2000
キラン・ナダール美術館(ニューデリー、インド):『カサンドラ』2009
ニューヨーク近代美術館(米国):『ローハル・チャウルの象形文字』1991、『ゲームピース』2003, 2009
シンガポール美術館(シンガポール):『ハムレットマシン』2000、『多様性の中の統一』2003
アムステルダム市立近代美術館(オランダ):『罪』2001



芸術・文化賞

アピチャッポン・ウィーラセタクン

タイ
映画作家、アーティスト
1970年7月16日生(42歳)

贈賞理由

アピチャッポン・ウィーラセタクン氏は、制作・監督のみならず脚本・編集までを自ら行う気鋭の映画作家として、世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている。鬱蒼たる森を舞台に据え、民話や伝説に基づく物語のなかに個人的な記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法を用いた作品群は、国際的に高く評価されている。

1970年バンコクに生まれ、タイ東北部のコーンケン県で育ったアピチャッポン氏は、コーンケン大学で建築学を学んだのちに渡米し、1997年にシカゴ美術館附属美術大学大学院(SAIC)で美術部門(映画制作)の修士号を取得した。在学中より実験的な短編作品を次々と発表し、帰国後の1999年に自らの制作プロダクション「キック・ザ・マシーン」を設立して本格的に映画制作を開始した。

2000年の長編第1作『真昼の不思議な物体』は、旅の途上でカメラを向けた人々に「不思議な物体」の物語をリレー式に語り継がせるという、従来の脚本や監督の概念を覆す手法で注目された。ミャンマー人移民労働者の青年とタイ人女性が森の中で交流する第2作『ブリスフリー・ユアーズ』(2002)でカンヌ映画祭の「ある視点」部門賞を受賞、さらに若い兵士が前世で人間だったという虎と密林で遭遇する『トロピカル・マラディ』(2004)で同審査員賞を受賞した。

そして2010年に『ブンミおじさんの森』で、タイ人初となるカンヌ映画祭最高賞(パルム・ドール)を受賞。深い森に住む死期の迫った主人公ブンミのもとに、亡くなった妻や猿に変身した息子が現れるという独特の死生観・人間観に満ち、かつて民主化運動の弾圧に加わったブンミの記憶や前世の逸話も挿入される本作は、デビュー以来10年の歩みが集成された代表作となり、日本でも一般公開されて人気を博した。

アピチャッポン氏は、映画制作と並行して1998年以来、美術の分野でも映像インスタレーションを中心に旺盛な創作活動を繰り返し広げており、近年の「プリミティブ・プロジェクト」では、映像インスタレーション、長編映画、プロジェクトの世界観を示した美術図書など、アートの諸領域を横断する複合的な創作を行っている。『ブンミおじさんの森』も同プロジェクトの一部に位置付けられている。

このようにアピチャッポン・ウィーラセタクン氏は、斬新な映像表現を生み出す若い世代の旗手として世界の映画界に大きな刺激を与え、ジャンルにとらわれない多彩な創作活動を展開している。その業績は、まさに「福岡アジア文化賞－芸術・文化賞」にふさわしい。

経歴

アピチャッポン・ウィーラセタクン

1970	タイ、バンコク生まれ
1994	コーンケン大学卒業(建築学) 短編映画、ショート・ビデオ制作開始
1997	シカゴ美術館附属美術大学大学院修士号(美術・映画制作)
1998	アート作品や映像インスタレーションの創作活動開始
1999	制作プロダクション「キック・ザ・マシーン」を設立
2000	初の長編映画『真昼の不思議な物体』を発表
2001	第7回山形国際ドキュメンタリー映画祭優秀賞(『真昼の不思議な物体』)
2002	第55回カンヌ映画祭「ある視点」部門賞(『ブリスフリー・ユアーズ』) 第3回東京フィルメックス最優秀作品賞(『ブリスフリー・ユアーズ』)
2004	第57回カンヌ映画祭審査員賞(『トロピカル・マラディ』) 第5回東京フィルメックス最優秀作品賞(『トロピカル・マラディ』)
2005	タイ王国文化省よりシラパートナー章
2006	ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門 出品『世紀の光』
2008	フランス芸術文化勲章シュヴァリエ章 第55回カーネギー・インターナショナル ファイン・プライズ(映像インスタレーション作品 <i>Unknown Forces</i>)
2009	映像インスタレーション作品『プリミティブ』発表 オーストリア映画博物館にて主要作品のモノグラフを出版(英語)
2010	第63回カンヌ映画祭最高賞(パルム・ドール)(『ブンミおじさんの森』)
2011	フランス芸術文化勲章オフィシエ章
2012	第13回ドクメンタにて、精霊の彫刻を公開
2013	シャルジャ・ビエンナーレ賞

主な作品

『真昼の不思議な物体』(長編, 2000) *Mysterious Object at Noon / Dokfar Nai Meu Marn*
『ブリスフリー・ユアーズ』(長編, 2002) *Blissfully Yours / Sud Sanaeha*
『トロピカル・マラディ』(長編, 2004) *Tropical Malady / Sud Pralad*
『ワールドリー・デザイアーズ』(短編, オムニバス映画『三人三色』の一篇, 2005) *Worldly Desires*
『世紀の光』(長編, 2006) *Syndromes and a Century / Sang Sattawat*
『Unknown Forces』(映像インスタレーション, 2007) *Unknown Forces*
『輝かしき人々』(短編, オムニバス映画『世界の現状』の一篇, 2007) *Luminous People*
『プリミティブ・プロジェクト』(映像インスタレーション他, 2009) *The Primitive Project*
『ブンミおじさんの森』(長編, 2010) *Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives / Lung Boonmee Raluek Chat*
『メコンホテル』(短編, 2012) *Mekong Hotel*
『Dilbar』(映像インスタレーション, チャイ・シリとの共作, 2013) *Dilbar*

主な展示会・上映会

『World Artists for Tibet Exhibition』プロジェクト304(バンコク、タイ) 1998
『第7回イスタンブール国際ビエンナーレ』(トルコ) 2001
『カンヌ映画祭』(フランス) 2002, 2004, 2010
『第63回ヴェネチア国際映画祭』(イタリア) 2006
『第34回トロント国際映画祭』(カナダ) 2009
『アピチャッポン・ウィーラセタクン:プリミティブ』(個展) パリ市近代美術館(フランス) 2009-10
『第51回テッサロニキ国際映画祭』(ギリシャ) 2010、『レトロスペクティブ:アピチャッポン・ウィーラセタクン』
Retrospective: Apichatpong Weerasethakul
『For Tomorrow For Tonight』(個展) アイルランド近代美術館(ダブリン、アイルランド) 2011
『第13回ドクメンタ』(カッセル、ドイツ) 2012
『シャルジャ・ビエンナーレ11』(アラブ首長国連邦) 2013

2013年(第24回)福岡アジア文化賞

公式行事一覧

2013年(第24回)福岡アジア文化賞授賞式

※参加者/公募及び招待

- 2013年9月12日(木) / 18:15 ~ 20:00
- アクロス福岡 1 F 福岡シンフォニーホール(定員:1,200名)
- 司会/ジュディ・オング氏

祝賀会-受賞者の栄誉を讃える祝典

※参加者/招待

- 2013年9月12日(木)
- アクロス福岡地下2 F イベントホール

学校訪問-受賞者の講演、生徒との交流

※参加者/生徒

- 2013年9月13日(金) ほか
- 福岡市内の高等学校及び小中学校

市民フォーラム

※参加者/公募

大賞受賞者、中村 哲氏によるフォーラム

「アフガニスタンに生命の水を^{いのち}〜国際医療協力の30年」

- 2013年9月14日(土) / 13:00 ~ 15:00
- アクロス福岡地下2 F イベントホール(定員:500名)

芸術・文化賞受賞者、ナリニ・マラニ氏によるフォーラム

「より良い社会の実現のために〜世界とアートの可能性」

- 2013年9月14日(土) / 17:00 ~ 19:00
- アクロス福岡地下2 F イベントホール(定員:500名)

芸術・文化賞受賞者、アピチャップン・ウィーラセタクン氏によるフォーラム

「“アピチャップン・マジック”とは何か〜自作を語る」

- 2013年9月15日(日) / 13:00 ~ 17:00
- イムズ9 F イムズホール(定員:350名)

学術研究賞受賞者、テッサ・モーリス=スズキ氏によるフォーラム

「草の根社会からアジアへと架ける橋〜国境を越える日本の豊かな伝統」

- 2013年9月15日(日) / 17:30 ~ 19:30
- アクロス福岡地下2 F イベントホール(定員:500名)

授賞式典および市民フォーラムの申し込み

下記ウェブサイトにて授賞式典および市民フォーラムの申し込み受付を行っております。

<http://fukuoka-prize.org/contact/apply/>